

## 夜更けの夢言劇



私はここに来た。  
かつていた世界よりも  
日常の物の陰影が  
やや暗く淡いとにろるに。  
私は醒めに醒めて  
いっせつもここにいてるのにとなる。  
でも、ありがとう。  
私のまぶたを閉じさせてくれたひとよ。

——小野十三郎「一匹の水牛が道を横切る」より

## 一、パントマイム・クイーン

通う人もいなくなってしまうた街角の小さな教会の前で、一人の女性が言葉のない劇を続けていた。彼女はパントマイム・クイーンと呼ばれていた。パントマイム・クイーンは長い髪の毛を無造作に束ね、真っ黒なレースの服に身を包み、白塗りの顔には誰にも読み取れない表情を浮かべていた。彼女の手の動きに従い、形も質感もともなわない壁が現れた。そして彼女は形も質感もともなわない椅子に腰掛け、形も質感もともなわないピアノを奏で始める。すると、音のない音楽が聴こえてくるのだった。

そのすぐ横には、八百屋の屋台が出ていた。店番の少年は虚脱したように頬杖をついていた。彼は口周りにヒョロヒョロと無精ひげを生やし、輝きのない大きな瞳をまぶたで半分だけ隠していた。少年の目の前、山と積まれた古野菜の向うを、薄ら寒そうに身を縮めた人々がせわしなく行き交っていた。たまに彼らのうちの誰かが足を止め、萎びた白菜だの南瓜だのを少年から買うこともあった。そして彼らは野菜の入った紙袋を胸に抱いて、パントマイム・クイーンの一人芝居を一瞥した後、またぞろ急ぎ足で歩き去ってゆくのだった。音のない喧騒の中で、機械時計が無機質に時を告げる中、誰もが疲れ果てていた。そして、一日が終わるのだった。

店番の少年は、ぼんやりとパントマイム・クイーンを眺めている。相変わらず彼女は無言劇を続け、そして夜は更けていった。街路を吹き抜けるまどろむような風は、退屈な日々を溶かしてゆく。彼女が見ている幻を少しわけてほしい、と少年は思うのだった。あの見えない壁をつたってゆけば、いつか失くしてしまった大切な場所にたどり着くことも、いつか忘れてしまった大切な人たちに巡り合うことも、きっとできるように思えたのだった。

## 二、威張ったクワガタ虫のはなし

とある林に、一匹のクワガタ虫が住んでいた。このクワガタ虫は、いつも鼻につくほど威張り散らしているという専らの評判であった。と言っても、彼は自らの意思によつて威張っていたわけではなかった。むしろ、彼本人（本虫？）としては、むしろ自分が威張っているつもりなどは毛頭なかったのである。

威張ったクワガタ虫は、林の中で一番の長寿だった。もう何十年間も生き永らえているという話だった。他の昆虫たちは、それだけで恐れを成してしまうのだった。彼らにとつては、何十年間も生きることとは勿論、一冬を乗り越えることすら驚異なことだったのである。ともかくその年齢が、彼が「威張っている」と周囲に誤解を与えている要因の一つでもあった。

また、威張ったクワガタ虫はかなりの巨漢であった。元々体が大きかったのか、それとも長く生きているうちに体も巨大になっていったのか、それは今となってはわからない。ともかくその迫力のあるガタイが、彼が「威張っている」と周囲に誤解を与えている要因の一つでもあった。手当たり次第に荷物を詰め込んで不恰好に膨らんだ、古びた旅行鞆のような胴体から、やせ細った足が六本伸びている。頭の上には、大きく歪曲した二本の角が天に向かって突き出している。若い頃はつややかに黒光りしていた肌は、長年の風雪にさらされた上に埃がふり積もり、すっかり古惚けてしまった。そして、風に飛ばされて来た落葉や木の枝が体中に付着し、糞虫のばけもののような容姿に成り果てているのだった。

威張ったクワガタ虫はその長い人生（虫生？）のうちで、一匹の妻も娶らず、一匹の子どもも作らずに生きてきた。寂しくないのか？と問われたら、彼は不遜な態度で「もちろん寂しい」と答えるのだった。

威張ったクワガタ虫はここ数年、お気に入りのクヌギの木の幹にへばりついたまま、少しも移動せずに暮らしていた。彼の六本の足は、古びた旅行鞆のようなその巨体を運ぶには衰えきっていた上に、その木の表皮と癒着してほとんど同化してしまっていたのである。しかし、ちっとも動かないということではエネルギーの消費が極めて少なく、食べ物が手に入らない冬の間も、平気で生きていることが出来るのだった。

夏の間は、彼の舎弟が食べ物を持って来てくれた。食べ物はもちろん、新鮮な樹液である。

舎弟はひと夏ごとに交代した（なぜなら舎弟たちは夏の終わりには妻を娶って子どもを作りに行ってしまう、そのまま帰って来ないからである）。舎弟は代々彼と同族のクワガタ虫が成っていたのだが、今年彼の舎弟に成ったのは何故かカブト虫だった。林の中のヒエラルキーでは、時に変動が見られるにせよ、たいていカブト虫一族の方がクワガタ虫一族よりも優勢であった。そのカブト虫一族の若者がクワガタ虫一族の老人にこき使われて

いるなんて、と、カブト虫一族の中にはこれを快く思わぬ者もいたが、別に何か問題が起るわけでもなく、舎弟カブト虫は威張ったクワガタ虫のところへせっせと樹液を運ぶのだった。時折その仕事に不満を感じ、ぶつくさ不満をこぼすこともあったにせよ。

今年、林を吹き抜けてゆく夏風は、いつもより多く湿気を含んでいた。団子虫やなめくじといったじめじめした連中が上機嫌で宴会を催す一方、威張ったクワガタ虫は相変らずクヌギの木にへばりついたまま、特に何もせずにごろごろしていた。そして、気づかないうちにハエにタマゴをうみつけられていた。

ハエは、クワガタの背中肉(とうに腐って朽ちていた)にもぐりこんで、タマゴを仕込んで行ったのである。やがて、クワガタの背中で、大勢のうじ虫が生まれた。いつものように、ボロボロのバケツに一杯樹液を汲んでやって来た舎弟カブト虫は、この有様を見て仰天した。

「どうしたんですかクワガタさん。託児所でも始めたんですか」

「不法占拠の犠牲者だよ、おれは。」クワガタは背中に乗っている赤ん坊たちをあやしなから、眠た気な声でそう言った。「しかし、こいつらの親は無責任にも何処かへ飛び去ってしまった。仕方がない、おれがこいつらの面倒を見る。社会福祉のための貢献になるだろう」そして、カブト虫が運んできた樹液をうまそうに飲み始めた。樹液はクワガタの全身に限なく行渡り、そしてうじ虫たちも潤した。

そんな風にして、林にうごめく虫たちは生きていた。特に幸せでもなかったが、不幸せでもない日々であった。——それを殊更に「幸せな日々」と呼ぶのかもしれないが。

### 三、地上げ屋ヨネタ氏、あくまで野点を愉しむ

空は曇り空だった。威張ったクワガタたちが暮らす林の近くに、数台の黒塗りの車が停まっていた。その中から、サンングラスに白いスーツ、先端のとがった靴を履いた男たちが、幾人も連れ立ってぞろぞろと降りてきた。その男たちは頬に一筋の傷を持つ者あり、手の小指を失くしている者あり、(スーツに包まれていて見えないもの)背中に一生消えない落書きを背負っている者あり、辺りに漂う沈黙の重たさが、彼らの烈しい人生を静かに物語っていた。たちまちにして、平和そのものの田園風景に、夜の裏通りに沈殿しているような物騒な空気が漂い始めた。見慣れない連中だな——舎弟のカブトムシが木の枝の上から、突如出現したこの奇妙な一団を観察していた。それにしても、よくもまあここまで骨相の悪い連中を一ところに集められたものだ。カブトムシは呆れつつ——もとい、驚嘆しつつそう思った。しかし、最後に車から降りて来た初老の男性は、その骨相の悪い連中の中であって、一人だけ異彩を放っていた。

その人物は、素人目にも上物と分かるコートと山高帽、清潔な白手袋を身にまとい、深い皺の刻まれた顔には立派な髭をたくわえ、虫も殺さぬと言いたげな穏やかな表情を浮かべ、ステッキを持ち歩く姿もまるで英国の紳士のように様になっていた。山の上から転がり落ちてきた木枯らしが、彼のコートををはためかせた。「今日は少しばかり風が強いようだ」と紳士は誰に言うでもなく一人ごちた。

「向うに見えている林も開発予定地に入っています、ヨネタさん」骨相の悪い男のうちの一人が、紳士にそう話しかけた。

「そうか。楽しみだな。計画は着々と進んでいるわけだ。」

「はあ。ですが、どうも五月蠅い連中が多くて……。特にあの『デュプリー食堂』の親父、死んでも立ち退かないなんて吐かしているんです。今、ウチの若い者が挨拶に回っています、あの老いばれ、なかなかしぶとい奴等です……」

ヨネタさんと呼ばれた紳士は、綺麗に整えられた髭を軽く撫でつけつつ、静かに言った。

「まあ、今日はその話はよしとこう。お前たちも仕事のこととは忘れて、たまには心の洗濯をするべきだ。荒んでばかりじゃ、人生面白くないぞ」

「おいおい、こいつら地上げ屋かよ——。カブトムシは木の枝から、一部始終を見聞きしていた。」

ヨネタ氏の子分たちは車の中から大きな敷物を取り出し、それを地べたに敷いた。そして、一列になって正座し、ヨネタ氏が手ずから運んだ白木の箱から次々と茶道具を取り出し、それらをひとつひとつ然るべき位置に並べていくのを、息を詰めて見守っていた。

「おいおい、こいつら、ここで茶会をする気だよ!——カブトムシは思わずそう叫んだ。しかし虫の叫びがにんげんに届くわけもなく、ヨネタ氏は平然とお茶の準備にいそしむのだった。」

こうして、地上げ屋たちの野点が始まった。こうやってみんなで野点をするのも、これでもう数回目になる。最初は戸惑っていた子分たちも、そろそろ一通りの作法を覚えたように、落ち着いた面持ちで座っていた。ヨネタ氏は湯を沸かしながら、空を見上げた。高い木立が空を隠していた。

※※※※

「諸君、稲刈市は変わろうとしている。いや、変わらなければならぬ。腐った身体にメスを入れ、もう一度この素晴らしい街を立て直すのだ。そのためには、我々の力が是非とも必要なのだ。」

稲刈市は区画整理によって発展してきたという歴史がある。戦前、稲刈市は県南の一集落にしか過ぎなかった。しかしそれがあつという間に、押しも押されぬ百万都市にまで発展した。それを可能にしたのが、知事のブレーンであり地方政界の黒幕でもあつた豪傑、杉山大志による区画整理だ。もし杉山が、あの強引な都市改造計画を推進していなければ、稲刈市は今でもただのつまらない片田舎のままだったことだろう。

我々も杉山の志に倣い、稲刈市のさらなる発展に貢献しなければならぬ。そのためには、第四区をより有効に活用した街づくりを行わなければならない。

我々の計画したプロジェクトが成功すれば、今まで議会からも行政からも見捨てられ、冷たい仕打ちを受けてきた第四区は生まれ変わる。それが起爆剤となり、稲刈市全体の経済も活性化するだろう。もちろん、多少の痛みを被ることは不可避だ。しかし、この街の将来のためにはどうしても荒療治が必要なのだ。我々が行おうとしているのはやくざな地上げではない。素晴らしい事業なのだ。ほとんど、慈善事業と言ってもいいくらいだ。これも、私の稲刈市への愛ゆえの鞭なのだ。」

ヨネタ氏は、現在進行しているプロジェクト——第四区の区画整理。成功すれば巨大なショッピングモールと団地が出来る予定。——について、行政や住民に対してそう説明していた。

——しかし正直な話、この計画があまりにも無茶苦茶過ぎるものであることは、ヨネタ氏自身が一番よくわかっていた。ものを作ればなんとかなった時代は、もうとつくの昔のことである。ショッピングモールを作ったところでたいした経済効果はないだろう。団地を作ったところで移り住む人もいないだろう。後には、蹂躪されズタズタに引き裂かれた街が残るだけだろう。当たり前のことだが、この計画は、地上げの収益を得るためだけの、ヤクザな仕事さ。それが彼の本音である。

——しかし本当のところは、その地上げの収益すら、彼にとってはどうでもいいことだったのである。ありていに言えば、彼は単に、悪趣味な商業施設・娯楽施設と、景観と自然を破壊する新興住宅地が、稲刈市の一角をきたならしく侵食していく様子が見たかっただけだった。

ただ、彼自身もその奇怪な欲求を自覚していなかったのである。

ヨネタ氏は、県北の山間にある小さな村で生まれ育った。村は、冬になると雪に閉ざされてしまった。降り積もった雪は元々静かな村をさらに静かにし、吹き抜ける風を凍てつかせるのだった。彼の通った小学校も、中学校も、今では廃校になってしまった。あまりにも冬が寒すぎたのだった。

ヨネタ家は貴族の血筋だったらしい。その事実（事実かどうかは定かではないが）は、雪に閉ざされた村に生きるヨネタ家の人々にとって、真冬の暖炉のように幸せをもたらす、

大切な心の支えであった。ヨネタ氏の祖父は、ヨネタ氏に幾度となく家系図を見せ、ご先祖の栄華について熱弁をふるうのだった。また祖父は、家の奥に数点の骨董品や絵画、寶石の類を大切に保管していた。時折機嫌がいい時には、ヨネタ氏にもそのコレクションを見せ、この壺は我が家に伝わる大切な財物だ、この軸はさる高名な絵師が描いたものでな……などと、と誇らしげに蘊蓄を傾けるのであった。

あれは耄碌じいさんの戯言だよ、うちが貴族の家系だなんてバカバカしい話だ、ヨネタ氏の父はそう言って笑っていた。しかし、そう言いつつも、父もまた祖父と同じく、ヨネタ家が没落貴族であるという事実（事実かどうかでは定かではない）にある種独特の思い入れを抱いているのだった。父は、良家の血を引いているという意識がどこかにあるせいも、たまに牛肉を食べる時は一番いい肉を買って来させ、コートの手地にこだわってみたりもし、煙草は高級な銘柄のものしか吸わなかった。ヨネタ氏は、そんな父の志向をあまり好ましく思っていないかった。貧乏人のくせに成金趣味しやがって——ある時、些細なことでも父と言ひ合いになった時、ヨネタ氏はそう吐き捨てた。父は、無言でヨネタ氏の左耳を力いっぱいなぐりつけた。そのせいも、いまだにヨネタ氏は左耳だけ聞こえがやや悪い。

家を出る時、ヨネタ氏は家の奥にしまわれた骨董品をいくつかくすねていった。祖父が死んだ後、手入れをする者もいなくなり、財物は埃をかぶって散逸しかけていた。

埃まみれの皿や壺、不気味な鶴が描かれた掛け軸などを街の質屋に持っていくと、拍子抜けするような値段をつけられた。質屋の番頭は面倒くさそうな目つきでヨネタ氏と、彼の差し出した壺や皿を一瞥した。ヨネタ氏は沈黙した。別に哀しみも起こらなかった。

いちいち哀しんでいる暇もなかったのである。家を出たヨネタ氏は、当時目覚しく都会化しつつあった稲川市で暮らし始めたばかりだった。稲川市は中途半端な都会であった。そこに暮らす人々は、田舎者特有の排他的性格と、都会人特有の冷淡さを合わせ持っていた。彼らは、山奥からやって来たばかりのこの貧しい男を、受け入れようとするはずもなかった。

結局、ヨネタ氏は稲川市に自分の居場所を発見することができずじまいだった。彼は安い酒を飲みすぎた夜など、地表を覆いつくす何千何万もの家々の灯りを見ながらふと思うのだった——こんなたくさんの人がいるのに、俺には居場所はない。これだけ灯りが瞬いているのに、俺を温かく迎えてくれる灯りは存在しない——

居場所を求めらるうち、彼は繁華街の裏通りにたどりついた。そこには酒と煙草のにおいが立ち込め、同じように居場所をなくした連中がどこからともなく集って来っていた。

唯一彼がまともに付き合えたのは、街の裏にたむろしている、暴力的で気性の荒い、しかし仁義にだけは厚い連中だけだったのである。

結果、気づいた時にはヨネタ氏はHardかつHeavyな人生を歩み始めていた。彼は拳で語らい、言葉の変わりに血を吐いた。それまで温厚で人見知りをする性格だった彼は、どんどん変貌してゆく自分自身のありさまに驚きを禁じえなかった。それでも心臓が脈打っているのを感じることは爽快だったし、ゴミ箱がひっくり返り、アル中やヤク中もひっくり返っている裏通りは、思いの外心地よい寝場所になるのだった。

それから月日は流れた。ヨネタ氏は裏通りの世界において才覚と根性でもって這い上がり、この地域の元締めにまで上り詰め、ささやかとは言えそれなりに贅沢な生活が出来るようになった。

その頃から、ヨネタ氏の中にあるブルジョワ趣味が静かに爆発し始めた。牛肉を食べる時は一番いい肉を買って来させ、コート生地をこだわってみたりもし、煙草は高級な銘柄のものしか吸わなくなった。それは端から見れば、持ちつけない金を持った人間が陥るありがちな行動パターンに見えた。しかし彼の場合は、話がやや複雑なのだった。彼の中を流れる貴族の血が騒ぎ始めたのだろうか？それとも、かつて祖父や父を蝕んだ痛々しい妄想が、とうとう彼にも取り付いてしまったのだろうか？

最初は、知らず知らずのうちにブルジョワ趣味に墮して行く己に嫌悪感を抱きもした。これじゃあ、あの胡散臭い親父とまるで同じじゃないか——。しかし歳を取るにつれ、そんなことはどうでもよくなった。いいじゃないか、ブルジョワ趣味でも。俺は生きたいように生きる、それだけの話だ。ただ、俺は親父のような中途半端なブルジョワ趣味には墮さない。俺は金には不自由していない、本当に質のいいものを手に入れるだけの話だ。座ってみるよ、この肌触りの滑らかなソファに。ワインセラーの中を見てみるがいい、腰を抜かずぞ。なんなら一本飲んでいくか、ちようどいいチーズが手に入ったところなんだ——。古めかしい調度品に囲まれて、品のよいスーツに身を包み、ヨネタ氏はこの上なく穏やかな気分浸るのだった。

最近、花や茶の稽古事も始めてみた。特に茶道はお気に入りだ。とかく成金趣味に陥りやすい俺に、わびやさびの素晴らしさを思い出させてくれる。茶を立てていると、組の抗争のことも、昔犯した罪のことも、気にならなくなってしまう——。彼は子分を引き連れて、折に触れて茶会を開いた。今日もそうだった。

人死にすらも当たり前前の毎日を、ヨネタ氏は優雅で華麗な物腰でもって生き抜いてゆくのだった。舶来品の葉巻の匂いを、あたり一面に漂わせながら。

高度経済成長期以後、稲刈市には家が増えてゆく一方だった。その過程では色々と表にでないこともあり、ヨネタ氏もそのうちのいくつかには直接関わった。県議会と土建と裏街道の住人、すねに傷を持つ者たちが集まって、お互いの傷を癒着させ合っていた。多くの無意味な公共事業が行なわれ、欠陥住宅が立ち並んだ。バブルの時には、昔からこの土地で信仰を集めていた落穂山という山を切り崩して団地を作った。山を切り崩した時に出土は海へ運んで埋め立てに用い、そして海岸線が無茶苦茶にして、つまらない海浜公園を作った。そうした事業は一時的に一部の業者に利益をもたらした。そして後には、切り刻まれた街だけが残った。

いつまで経っても、ヨネタ氏は稲刈市が好きになれなかった。美しい場所など消えてしまえばいい。無機質で汚い街になってしまえばいい。彼の心の奥底、彼自身が気づかない場所、彼はそう念じ続けているのだった。

そしてヨネタ氏は地上げ屋として、暗躍を続けるのであった。

※※※※



急に風が強くなってきた。木々は上下左右に揺さぶられ、危うく舎弟カブトムシは落下しそうになった。こいつはまずい、と彼は生い茂った葉っぱの下をくぐり抜け、一目散に逃げ出した。早く家へ帰って、酒食らって寝ちまおう。それで明日、この奇天烈な茶会の話をクリック先生に聞かせてやることにしよう。

さて、ヨネタ氏の方はと言えば、カブトムシが退散した後もなお、古惚けた薄灰色の茶碗を手に平然と座っているだけである。

追いつ打ちをかけるように、曇天模様の空から激しい雨のつぶてが落ちて来た。とうとう降り出しやがった！さすがに地上げ屋たちも騒然とし、思わず腰を浮かしかけた。しかし、親分は相も変わらず落ち着き払って茶を立てようとしているので、子分たちは中腰になったまま途方に暮れている有様である。

それでも一人の忠誠心の強い男が立ち上がり、車の中から傘を取って来た。彼はそれをヨネタ氏の上にさしかけた。しかしズブ濡れのヨネタ氏は、さしかけられた傘を手で制した。

どう、と一際大きな突風が吹きつけてきた。子分が捧げ持っていた傘は全部の骨が逆方向に折れ曲がり、あつという間にごみになってしまった。と、それと同時に、突風に吹き飛ばされた一枚の看板が物凄い勢いで転がって来て、ヨネタ氏の顔を直撃した。看板には**マンション分譲予定地**という大きな文字が、誇らしげに踊っていた。その看板はヨネタ氏の顔に大きな傷を作り、傷からはぼたぼたと血が滴り始めた。子分たちは青ざめ、ヨネタ氏に駆け寄ろうとするものの、突風と豪雨に阻まれてそれも果たせない。

しかし当のヨネタ氏とは言えは、やはり何食わぬ顔で茶を立てているばかり。滝のような雨に混じって、彼の顔から滴った鮮血が流れてゆく。

子分たちは平伏した。

#### 四、世界うじ虫会議

あたまをもたげる  
腹がうねる

古い肉のかたまりに我が身をうずめ  
夜を明かした

——杉山京二『空飛ぶ西瓜詩集』より——

威張ったクワガタの背中において、世界うじ虫会議が開催された。出席者は、もちろんクワガタの背中に住んでいるうじ虫たちである。ちなみに「世界うじ虫会議」における『世界』とは、無論クワガタの背中のことであり、「おれの背中も何だかどえらい扱いを受けるようになったものだ」と、クワガタは不思議な感慨に耽るのであった。

「諸君！今日はこうしてお集まり頂き、感謝の言葉も出ないぐらいだ！」議長うじ虫が叫んだ。

「いいから出してみろ！」やじうじ虫がが叫んだ。

「議題は何だ？」誰かが叫んだ。

「議題だと？」と議長うじ虫。「議題はそのうち、自然と湧いて来ることだろう！」

「ところで諸君！」哲学者気取りうじ虫が挙手（？）した。「まず私としては、本会議が開かれているこの世界——すなわち、我々が生きているこの世界について考えてみたいと思う。」

「異議なし！」怒号のような合唱が巻き起こった。

「この世界は一体、何処から生じたのだろうか、何のために生み出されたのだろうか。我々はこの世界を寢床とし、日々を漫然と生きている。しかし私は問いたい、この世界とは、一体、如何なる事象なのだろうか！？」

おれの背中だよ、とクワガタは思った。

「哲学者気取りうじ虫殿の言うとおり、我々はこの世界に漫然と生きている。ぬくぬくと地べたをむさぼり、そこに我が身を埋め、静かに栄養を蓄えている。しかしそれは果たしてよいことなのだろうか。我々はいたずらに日々を浪費し、ただただ安楽な生を願っている。果たしてそれはよいことなのだろうか」倫理学者気取りうじ虫が言った。

「よいことだ！」芸術家気取りうじ虫が叫んだ。「安楽に生きているからこそ心に余裕が生まれ、そして芸術も生まれる。」

「異議あり！」道徳家気取りうじ虫は叫んだ。「芸術など墮落の最たるもの！我々は今こそ、我々うじ虫にふさわしい崇高な生き方を模索せねばなるまい！ただ欲望のままに食って死んでゆく、それだけではあまりにむなしい半生だ。」

「心配なく、同志諸君！」生物学者気取りうじ虫が叫んだ。「生憎、我々はこの世界にいつまで

もいられるわけではないのだ。いずれ、嫌でもこの世界を出て行かなければならなくなる。」

「なんだと!？」一同は驚愕した。

「私の研究では、我々はいつかサナギというものになり、然る後に成虫というものになり、そしてこの世界を捨てて別の世界へと旅立つことが決定されているのだ」

「別の世界とは?」

『空』と称されるステージだ」

『空』!？」うじ虫たちはお互いに顔を見合わせ、そして叫んだ。『空』とはなんだ!？」

「頭上に在る、とされている。我々の母君も、そこからこの世界に飛来し、そして我々を産んだのだ」

「何!?母君!？」ざわめきが世界（クワガタの背中）を支配した。母君!母君!中には、生き別れた母を思い涙をこぼすものまでいた。

「諸君!頭上を見てみよ!我々はいずれ、あの『空』と称される広大なステージへと飛び立たねばならないのだ!」

うじ虫たちは騒然となって空を見上げた。中には、頭と間違えて尻尾を空に突き出した者までいた。しかし、件の空はというと、高い木立に隠れてよく見えないのだった。クワガタは、もつとよく空が見えるよう、木の上まで彼らを運んで行こうかと一瞬は思ったのだが、それは無理な所業であった。そしてクワガタは改めて思い当たったのだった、そう言えばおれも、もう長い間空というものを見ていない気がする、と。

あたまをもたげる

腹がうねる

古い肉のかたまりに我が身をうずめ

夜を明かした

羽根が生えて

肢体が生えたらば

どこまでも飛んでゆくさ

あたまをもたげる

腹がうねる

古い肉のかたまりに我が身をうずめ

静かにいのちを燃やしていた

## 五、やせいなもめちゃん

些細なもめごとが、そこかしこで起こっている。地上げ屋たちは薄っぺらな紙切れを携えて、相変らず営業を続けているデュプリー食堂に乗り込んでゆく。しかし、いくらなだめすかされようが、一転して怒鳴り散らされようが、食堂の親爺は顔色一つ変えない。親爺にとつては、それはあまりに些細すぎるもめごとだったのだ。俺が昔レストランで料理人の修行をしていた時、親方や先輩から受けたどぎついシゴキに比べたら、ヤーさんにどやされることくらい屁でもない。親方や先輩は本当にこわかった。なぜなら、その怒鳴り声は愛のあるものだったからだ。このヤクザどもの怒鳴り声には百パーセント悪意の塊で、もちろん愛など含まれちゃいない、そんなものは恐れるに足りない。そして親爺はその貧相な顔に何の表情も浮かべることなく、フライだのハヤシライスだの真っ赤なスパゲッティ・ナポリタンを黙々と作り続け、地上げ屋たちは捨て台詞を吐いて帰ってゆくのだった。なんと、些細なもめごとだろう。

些細なもめごとが、そこかしこで起こっている。舎弟カブト虫は重たいバケツを引きずって、威張ったクワガタ虫の住む大クヌギの木まで飛んでゆく。よくよく考えてみればなぜ俺はこんな奉仕活動に我が身を捧げているんだ？何の報酬もないままに、特に賞賛を浴びることもなく……彼はこうした不満をしばしば抱くのだった。しかし何故かクワガタ虫に直接不満をぶつける気にはなれず(クワガタの不遜な態度を見ると妙に気圧されてしまい、苦情を言う気も失せてしまうのだった)、そこら辺を気ままに飛び回っているスズメバチなどの若い衆に八つ当たりしてしまうこともあった。そして、スズメバチは売られた喧嘩を買うこともなく肩をすくめて飛び去り、カブトムシは八つ当たりした自分を恥じて黙り込んでしまうのだ。なんと、些細なもめごとだろう。

些細なもめごとが、そこかしこで起こっている。青少年少女たちの日常は、まさに些細なもめごとによって織られたタペストリーであった。行き場を失った子どもらは、二十四時間営業のコンビニの前にたむろして、覚えたばかりの煙草をふかす。彼らはそれぞれ、些細なもめごとを抱えて誰かを傷つけ、そして傷つけられている。些細なもめごとによって体育館裏に呼び出され、顔に浅黒い痣を作ってしまった少年が、些細なもめごとから彼女の頬をなぐり、後悔という名の鈍痛がその拳に深く残っている少年にカルピスサワーの缶を回してやる。その横では、腕を三角巾で釣った少年が微量のアルコールによって上機嫌になっている。彼は二週間ほど前、單車を無免許運転して倒したのだ。不幸中の幸いで、たいした怪我もせず、誰も巻き込まず、些細なもめごとで済んだのだった。そして、薄汚れたジャージと趣味の悪い化粧で武装した少女が、けだるそうに携帯電話をいじっている——その携帯電話が飛ばしている電波の先に、些細なもめごとと種があるようだった。それにしてもこのコンビニの駐車場はとも落ち着く集会場所なのだが、近隣の住民は「不良たちのたまり場になっている」として学校や警察に苦情の電話を入れているそうだ。青少年少女たちは、この安息の場からも駆逐されてしまうのだろう、ほんの些細なもめごとによって。

些細なもめごとが、そこかしこで起こっている。不眠症の文学部大学生が、夜食のカップ・ヌードルを買いに最寄のコンビニへ向かう。彼は目下のところ、大学のレポート課題をほったらかしにして趣味の小説を執筆中だ。深夜に小説を書くお腹が減るものである。しかし気が重いのだ、今夜もまたあけない悪餓鬼どもが店の前にたむろして、彼を威嚇するであろうから。食べ散らかされたスナック菓子、ジュースの空き缶、吸殻、それらをよけながら店内に入ろうとする彼を、胡散臭げな目で睨めつける少年少女たち。気弱な大学生は背中を丸め、目を合わせぬようにして通り過ぎる。噂では、あの不良どもに文句を言ったがために袋にされてしまった人もいるそうだ。とにかくあんな餓鬼どもともめるのはマッピラだ。あいつらも辛いんだってことはよくわかる、俺もほんの数年前まではあいつらと同じ、生意気な餓鬼だったから。よくわかるんだ。だが――。あいつらが辛いように、俺だって辛いんだよ。大学生はそそくさと買物物を済ませて家路を急ぐ。まあ、もめごとなんざ起こすにこしたことはないんだ。たとえそれが、どんなに些細なことであつたとしても。

些細なもめごとが、そこかしこで起こっている。夏の終わり、一人の少女が涼風に吹かれてゆらゆらと揺れていた。校舎裏の公衆便所の横、枝振りのいい木の枝に結わえた一本の縄につなぎ止められて、ゆらゆらと揺れていた。彼女が一人で抱え込んでいた両手いっぱいこの些細なもめごとが、彼女にそうさせたのだった。彼女にとっては、それらは些細なもめごとではなかったのだった。

些細なもめごとが、そこかしこで起こっている。夏の終わり、一人の少女がひっそりと起こしたこの事件は、多くの人たちに深い衝撃を残した。しかし、とうてい些細なもめごととは思えないその出来事すらもが、過ぎてゆく時間に蝕まれ、忘却の風に吹かれ、いつしか些細なもめごととして人々の記憶の片隅に留められるだけとなってしまった。

些細なもめごとが、そこかしこで起こっている。

## 六、舎弟カブト虫の嘆き

なんだってこんなことになっちまったんだろう。こ汚いバケツにたっぷり樹液を汲みながら、ブツブツとカブト虫が愚痴をこぼしている。愚痴はこぼしても樹液はこぼさない彼の勤勉さが、余計物悲しい。なんでカブト虫の俺が、あの耄碌クワガタ爺さんのために毎日セッセと樹液を運ばにやらんのだ？ 第一、自分のための樹液を手に入れるだけでも一苦労だと言うのに、なぜ他人のぶんまで？ 樹液にありつくには、クヌギの木で開催されている武道大会で優秀な成績を収めなければならぬ。毎日、カブトだの、クワガタだの、スズメバチだの、そういった昆虫の猛者たちが樹液を求めて集っては、戦い合っているわけだ。厳しい戦いである。まあ、自慢じゃないが、俺はいつだって優勝している。そんな強い俺が、なぜあんな爺さんにヘイコラしなけりゃならないんだ？

この前もカブト虫連中に笑われた。「お前も変わり者だよな」と。確かにそうだ、俺もそう思う。

そもそも何故俺はクワガタ爺さんの舎弟になったんだ？ 誰かに頼まれたわけでもないのに。確か最初は……俺が始めて武道大会で一位になって、一番いい樹液をたくさん手に入れた時だった。俺は上機嫌だった。その帰り道、爺さんのねぐらの前を通りかかった。俺は心が寛容になつていたのでこう思ったわけだ。「ああ、あの爺さん、腹を空かせてるだろうな」と。いらぬ情けをかけたわけだ。そして俺はその樹液を爺さんにおすそ分けしてやった。……そういうことが、それから何度か続いた。そして気づいた時には爺さんに樹液を届けることが習慣になつていて、俺は爺さんの舎弟と目されるようになってしまったんだ――。

「なんで俺はクワガタ爺さんの舎弟なんかやってるんだろう……」

行きつけの酒場で、カブト虫はふとそう呟いた。発酵した樹液の香りがあたりをたちこめ、それは鬨いに疲れたカブト虫の傷を優しく癒してゆく。女主人のアオムラサキは、舶来品の宝石で飾りつけた豪華絢爛を羽をひらひらさせながら自信たっぷりに答えた。「そりゃ、決まってるでしょう」

「何だよ」

「あんたが、爺さんのこと好きだからに決まってるじゃない」

「へ、笑わせるなよ」とカブト虫。は顔をしかめてみせる。

「いや、あんたはしょっちゅう爺さんの悪口言ってるけど、本当は爺さんをすごく気に入っているのよ。本当に嫌なら、そんなにセッセと樹液を運んで行ってやったりしないはずよ」

そんなもんなのかなあ、カブト虫はいまひとつ釈然としない気分です。クヌギ酒を飲む。アオムラサキは六本の足を次々と組み替えながら、器用に青紫色のカクテルを調合している。彼女の細い腰は若い頃からそのまま、流麗な曲線を保っている。しかし、厚く塗った燐粉の化粧では到底隠しきれず、目じりの深い皺が目立った。ああ、ママも老けたなあ、とカブト虫は心の中で呟いた。

とうとうある日、カブト虫は威張ったクワガタ虫にバケツを差し出しながら、なるたけ平静を装いつつ「なんで俺はあんたの舎弟なんかやってるんでしょ」と尋ねてみた。

この直球の質問に対し、クワガタは美味そうに樹液をズルズルと啜りながら、事も無げにこう答えた。

「お前が強いカブト虫だからだろうな」

「は？ どういうことです」カブト虫は狐に食べられたような顔をして問い返した。「情けないカブト虫だから、こうしてコキ使われてるんじゃないんですか」

「いや、本当にお前が情けなくて弱い奴だったとしたら、こんな毫碌ジジイに樹液を分けてやるような余裕なんぞ、持ち合わせていないだろうよ」

クワガタはそう言うと、バケツに残っていた樹液を一息に飲み干すなり、またぞろ昼寝を始めてしまった。

カブト虫は、眠り続けるクワガタの食い荒らされた背中を眺めていた。あのうじ虫たちも、ついに巢立ってしまったのだった。

カブト虫は空になったバケツを担いで、黙って帰って行った。

やがて季節は巡った。住み慣れた林の中の風景も、少しずつ変化を遂げつつあった。そんな日々の中で、舎弟カブト虫は生まれて始めての恋をした。

カブト虫は衝撃を受けた。この世に生まれてきたことの本当の意味を悟ったのだった。

そして、ある気持ちのよい秋の日、舎弟カブト虫は、彼の大切な恋人と連れ立って、何処かに飛び去って行った。

威張ったクワガタ虫は、彼らの後姿を静かに見送った。もうすぐ冬が来ようとしていた。

## 七、画家ムラタ氏の帰り道

街角で、ムラタ氏はふと足を止めた。風に飛ばされてきたのだろうか、ぼろぼろになった一冊の雑誌が彼の古靴にまわりついていた。彼は身を二つに折り、それを拾い上げた。それは子供向けの雑誌で、奇怪な形状をしたオモチャの広告や、テレビの中を縦横無尽に駆け巡っている、色とりどりのコスチュームに身を包んだ英雄たちの写真やイラストなどが掲載されていた。彼はその雑誌をポケットの中に押し込んだ。突然、寒風が街路を駆け抜けていった。やけに暗くなるのが早くなったな、とムラタ氏はひとりごちた。

「影が映っていますけれども、これは悪性のもではありません」レントゲン写真を何枚も壁に貼り付けて、医者はそう言ったものだ。あまつさえ、笑顔さえ見せたのだ。ムラタ氏は自分の胃ぶくろのシルエットをしげしげと見つめながら問うたものだ。「では、大丈夫なんですわね」

「ええ、大丈夫です」医者は眼鏡をはずし、ムラタ氏に背を向け、貧弱な胃ぶくろの像と対峙した。「検査結果は陰性でしたよ」

ああいう風に医者も言っていたことだし、大丈夫なんだろう。ムラタ氏はそう考えた。彼はここ最近、胃に奇妙な膨満感を覚え、そして時おり脳髄が痺れるような痛みに苛まれていたのだ。恐らく、もうおれのはらわたは使い物にならなくなってきているのだろう、彼はそう覚悟して病院へ行ったのだ。ところが医者は、なにも問題がないと言う。よかったじゃないか。実によかったじゃないか。ムラタ氏はそう呟いてみたものの、別に何の感慨もわかかなかった。

ムラタ氏は街の小さな下宿屋に住む、醜い画家であった。かつて若い頃には、ほんの少しではあるが絵が売れたこともある。たった一度だけ個展を開いたこともある。しかし、絵で食べていくことはとうとう出来なかった。二十代が終わる頃には、ムラタ氏は絵を売ることも、展覧会に作品を出品することもしなくなっていった。しよがないことだ、と彼は思った。

ムラタ氏は精神病院の清掃夫として生計を立てていた。勤続四十年、ムラタ氏は頑固なまでの実直さで労働にいそしんでいた。職場である精神病院と自宅を往復する、そして時たま絵を描く、それが彼の人生のすべてであった。ただ、最近、あまり手先がうまく動かず、また目もよく見えなくなってきたため、どうでもいいような単純作業を割り当てられることが多くなってきた。仕事が思うように出来なくなってくることは、少しだけ哀しかった。

彼はいつも孤独だった。かつてはそれを嘆きもした。

しかしよくよく考えてみれば、なぜムラタ氏が孤独になったのかと言うと、「あまり『にんげん』が好きではない」という彼自身の性格に起因するところが大きいように思える。彼は人付き合いを忌避し続け、自分の偏屈さを押し通し、その結果、現在の孤独な生き方に行き着いたのであった。要するに、今の彼の人生は、望みどおりのものであると言えるのだ。後年、そのことに気づいたムラタ氏は、もう二度と「華やかで幸せな人生」という幻想に胸を焦がすこともなくなった。なんだ、おれの生活だってそんなに悪くないじゃないか。そこまでいいとも思わないが。

そんな孤独な彼にも、友人と呼べはしないかもしれないが、それなりに心を許している人間が



二人だけいた。一人は、彼が暮らしている下宿屋の女将だった。女将はでっぷりと肥った猪のような老婆だったが、竹を割ったような性格で、毎朝ムラタ氏に元氣よく挨拶をしてくれるのだった。おはようムラタさん！今朝も寒いわね！——ムラタ氏は一度も彼女の挨拶に返事をしたことがなかったのだが、それでも心の中では挨拶をしてくれることを有り難く思っていたのだった。ただ、彼女の焼いたフルーツケーキだけはどうしても好きになれなかった。本当にひどい味なのだった。

もう一人は、裏通りにある大衆食堂「レストラン・デュブリー」（通称「デュブリー食堂」）の親爺である。ムラタ氏は、女将の都合で食事が出ない時や、給料が入って多少懐が温かくなった時など、この食堂に行つてささやかながら素敵な夕食を愉しむのだった。

その親爺は、不健康な痩せっぽちの男で、「汚いぬれ雑巾で顔を拭われた捨て犬」とでも表現したらよいだろうか、そんな物悲しい雰囲気を持つ人物だった。彼は無口だったが、なぜだかムラタ氏にはよく話しかけるのだった。ムラタ氏は適当な相槌しか打たないのだが、それが逆に親爺にとつては心地よかつたのかもしれない。

最後に行つたのはいつだったろう。確か親爺は、地上げ屋について怒っていたはずだ。

「最近、しょっちゅううちの店に地上げ屋が来てなあ」カウンターの向うで、親爺はせわしなくフライパンをゆすりながら言った。

「地上げ屋——」とムラタ氏。

「判を押すだけだ、判を押せ、とかぬかしながら、ペラペラの書類を押し付けてきやがる。でも、絶対押しやらねえんだ」親爺は勢いよくまくし立てた。「最初は猫なで声でなだめられ、最後には『ぶつ殺すぞ』と凄まれる。でも俺はそんなチンピラ、屁でもないね！」

ふと、ムラタ氏はフライパンを握る親爺の二の腕を見た。それは枯れ枝のように細く、骨と皮だけに見えた。

「この店をたたむわけにはいかねえよ。あんたも、俺の作った料理が食えなくなったらさびしいだろ？」

「ああ、寂しいだろうね」ムラタ氏はこっくり頷いた。

「そうだろうよ」親爺は満足げにうなづいて、フライパンの中身を皿にうつした。「はいよ、ポークピカタ定食お待ち！」

——あれからしばらく経つが、親爺は地上げ屋に屈せず商売を続けているだろうか。そうだが、今からこの足で、久しぶりに行ってみようか。検査結果もよかつたことだし、久しぶりにうまい飯を食うことにしよう。ムラタ氏は信号が変わるのを待ちながら、ふとそんなことを考えた。

廢墟になった教会がある街角にはいつものようにパントマイム・クイーンが立っていて、言葉のない一人芝居を続けていた。彼女の白塗りの顔が、街灯に照らされて宵闇の中に浮かび上がっていた。彼女の手の動きに従つて、その掌の上には林檎が現れた。彼女はそれを子氣味よい音を立てて頬張るのだった。彼女の横には八百屋の屋台が出ていて、そっちの方では「形と質感をともなった」林檎の山が、裸電球の灯りを受けて赤く輝いていた。店番の少年は頬杖をついたまま眠りについていた。一体どんな夢を見ているのだろうか、おそらく何の夢も見えないようだった。林檎、とムラタ氏は呟いた。

今宵のパントマイム・クイーンの観客は、三人の子どもたちだった。彼らはジュースの空き瓶を傍らに置き、寒そうに肩を寄せ合いながら、眼前で展開されている無言劇に見入っていた。ムラタ氏はその子どもたちの背後、彼らから少し離れた場所に、その大きな体をちぢ込めるようにして座り込んだ。子どもの中の一人がふと振り返り、ムラタ氏を一瞥したが、またすぐに前に顔を戻した。自分の真つ白い吐息で、視界が煙った。ムラタ氏は皺だらけの手をこすりながら、パントマイム・クイーンの劇を観ていた。何故だか、彼女には自分と近いものを感じるのだった。いつの間にか世界からはみだしてしまった「にんげん」が、自分の内に沈殿することで、新しく自分だけの世界を作り出そうとする——その営みが彼女と自分には共通している、ムラタ氏は漠然とそう思っていた。

それからどれほどの時間が経っただろう。子どもたちはきりのいいところで腰を上げ、ムラタ氏の両脇をすり抜けて歩き去って行った。もう日も暮れてしまった。きっと、家に帰りついたら、子どもたちは遅くなったことを親に怒られることだろう。

と、突然ムラタ氏は、背中に何かをぶつけられたような感触を覚えた。続いて、はるか遠くの方で、悲鳴にも似た甲高い矯正と、全速力で走り去っていく騒々しい足音が巻き起こった。さっきの子どもたちが、ムラタ氏に石ころをぶつけて逃げ去って行ったようだった。別に怒る気もなかった。他愛もないいたずらだと思っただけで、自分も同様の罪を幼い頃に犯した覚えがあった。第一彼は今までの人生において、こんなこととは比較にもならないような酷い仕打ちを幾度となく受けて来たのだった。

ムラタ氏は立ち上がった。子どもたちが座っていた場所には、透き通った色のジュースの空き瓶が転がっていた。ムラタ氏はその空き瓶を拾い上げた。甘酸っぱい味にする昔ながらの炭酸飲料の瓶だった。空き瓶を手には、ムラタ氏はパントマイム・クイーンを見た。パントマイム・クイーンはいつだって虚空を眺めながら劇を続けていたのだが、その一瞬、ムラタ氏は彼女と目が合ったような気がした。彼は無言だった。彼女もまた無言だった。静寂が支配する街角で、二人はしばらくの間言葉のない対話をするのだった。

ムラタ氏は空き瓶をポケットに突っ込んだ。そして、くるりと踵を返し、歩き始めた。遠ざかってゆくパントマイム・クイーンは、もう誰も見る人もいなくなったまま、無言劇を続けていた。彼女はあのままずっと続けるのだろうか。夜が更けて、誰も見る人もいないまま、たった一人で、無言劇を——。

ムラタ氏のポケットの中には、さっき拾った古雑誌も入っていた。彼は帰宅したら、その古雑誌と空き瓶を、目下製作中の作品の材料に使うつもりだった。

ムラタ氏はその作品を、自分の人生の半分以上の歳月をかけて作り続けていた。二十歳の時、今も住んでいる下宿に引越してから、そして現在にいたるまで、彼は誰にも知られることなく、その作品を作り続けていた。彼は街中で捨てられている粗大ゴミやガラクタの類を拾って来ては、部屋の中でそれらを貼り合わせ、ペンキで色を塗ったり、絵を描きつけたりしながら、自分の精神世界をそっくり具現化したオブジェを作っているのだった。古新聞紙や空き瓶、空き缶、空き箱や放置自転車、使い古されたマットレスや折れたビニル傘といった諸々の物体で構成されたオブジェは今や部屋をいっぱいにするまでに拡大していた。ムラタ氏はそれをキャンバスとして、思いつくままにありとあらゆるものを描きつけていった。彼の空想王国では、実際には存在しない

種類の奇怪な動物や美しい植物が彩りを添え、そして実際には存在しない子どもたち——彼が夢想した、数十人にもぼる自分の息子や娘たち——が楽しげに踊っていた。数少ない彼の知り合いも、ちよつとしたアレンジを加えられて登場していた。デュプリー食堂の親父は、この空想王国を警備する軍隊の炊事班長として描かれ、鍋を手に誇らしげな表情を浮かべていた(その鍋は、ムラタ氏がゴミ捨て場で拾って来た本物の鍋を貼り付けたものである)。また、彼の子どもたちが暮らす村をおさめている気さくな女村長として描かれているのは、下宿の女将であった。そして、空想王国に住む人々を導き、この世界の秩序を守っている女神として描かれている白塗りの女性は、パントマイム・クイーンだった。

オブジェのあちこちに、彼の自画像が描かれていた。子供の頃の彼の姿、青年時代の彼の姿、中年になった彼の姿、そして老いを感じ始めた、現在の彼の姿——何種類もの自画像がそこに在った。それらは完璧なリアリズムによつて描かれていた。ただ一つ現実と異なっている点は、絵の中の彼は、たくさんの素晴らしい友人たちに囲まれているのだった。

この果てしなく続く創作活動の産物、彼の一生を費やした作品が、一体いつ完成するのかについて、彼自身はちゃんと知っていた。いつか彼の命が燃え尽きた時、彼は自分自身の死体をこのオブジェに添えようと考えていた。そしてそれによつて、この作品は完成するのだ——。

彼はその時のことを幾度となく夢想した。それはとてつもなく恐ろしい夢想だった。と同時に、とつてもなく甘美な夢想でもあった。ガラクタに埋もれて横たわる、青白い自分の顔を思い浮かべる時、彼は思わず目を閉じ、身を震わせてしまふのであった。

身を切るような寒風が、街路を駆け抜けて行つた。その途端、ムラタ氏は腹部に抉るような痛みを覚え、その場にしゃがみこんだ。そして彼は、胃袋の膨満感が未だに取れていないことを改めて感じた。

医者という言葉が思い出された。——ええ、大丈夫です。検査結果は陰性でしたよ——

その言葉の裏にある真実を、ムラタ氏はわかつていた。しかし、彼の心は静かだった。ただコートの中に身を埋めながら、痛みがおさまるのを待っているだけだった。

とにかくこんな調子じゃ、折角デュプリー食堂へ行っても何も食べられそうにないな。彼にとつては、それが一番悲しいことだった。

しばらくして、ようやく痛みが和らいできた。ムラタ氏はゆっくり立ち上がり、少し猫背気味の姿勢を保ちながら、いつの間にかすっかり日の暮れてしまった寒い街を歩き始めた。

## 八、季節の移ろい

季節は移ろう。

威張ったクワガタ虫は、食い荒らされた背中に寒風がしみ込んで行くのを感じた。その突き刺すような痛みをじっと受け止めながら、ああ、また多くの虫たちが死んでゆく季節がやって来たのだな、と漠然と思った。

木の葉は色づいて落ち、幹はその表皮に深い皺を刻んで痛々しく立っている。虫たちは一生に一度だけの短い恋を終えて、そして同時にその生をも終えようとしている。木枯らしが林を駆け抜けてゆくと、夏の間の繁栄がまるで幻影であったかのように、なにもかもが目覚める直前に浅い眠りの中で見る不思議な夢であったかのように、収斂し、四散し、そして跡形もなく消えてゆく。ただ、虫たちは、そのたった一度だけの恋の帰結として、土の中に卵を残してゆくのだった。

季節は移ろう。

林の中。土の下には、幾千幾万という卵が息をひそめ、静かに眠り続けている。

## 九、海の火

三人の少年が海に行った。全員、つい最近自動二輪免許をとったばかりだった。彼らは厚手のウインドブレーカーを羽織って、メットは被らずに単車に跨った。そして、どこもない運転で国道をかつ飛ばし、海まで走ったのだった。この鋼鉄の馬に乗れば、どこへでも、どこまでも走って行ける気がした——もし、ほんの少しだけ運がよくて、ひとかけらの勇気さえ持っていれば。

彼らは来年高校を卒業する予定だった。卒業後の展望は何一つ見えていなかった。ともかく、将来のことどころか、今現在のことだって考えたくもなかった。彼らは時々こっそり学校を抜け出しては、裏通りの喫茶店で飲みなれないブラック・コーヒーを飲んだり、ビリヤードをしに街へ繰り出したり、橋の下で煙草をふかしたりするのだった。彼らはロックが大好きだった。彼らは野球が大好きだった。彼らは映画が大好きだった。彼らは女の子が大好きだった。彼らは孤独を好んだ。彼らは孤独を嫌った。彼らはすべてをあきらめたような素振りを見せながら、すべてに一抹の希望を抱いていた、しかしその希望すら間もなく粉碎されてしまうであろうことを、薄々感づきつつあった。

少年たちはバイクを乗り捨てると、波打ち際まで走った。まるで古い映画に出てくる、犬を連れて男の子のような軽快な足取りで。海は意味もなく彼らを高揚させるのだった。そしてまた、彼らが持参した大量の缶ビールも、彼らの高揚に拍車をかけるのだった。

空は曇っていたし、海は淀んでいた。砂浜はごみだらけで、何台もの廃車が乗り捨てられていた。しかし彼らにとっては、取るに足らないことだった。少年たちは砂浜に横たわる大きな流木の上に腰掛け、背徳の気分を愉しみながら缶ビールの蓋をあけた。海から吹いてくる冷たい風が心地よかった。

「来年の今頃は、こんな風にのん気にしちゃいられないんだろうな」少年たちのうちの一人が、ぼそりとそう呟いた。

「何しけたこと言ってるんだよ」隣に腰掛けていた少年が、苦笑いしながらそう返事をした。「今からそんなこと心配したって、気疲れするだけさ」

海の向うから風が吹いてくる。潮のにおいってものは、無性に懐かしいものだな、と少年たちは思う。

「確かお前は東京の大学を受けに行くんだよな」

「ああ。そうだよ」

「寂しくなるな。みんなそうやって、どこかに出て行っちゃまうんだからな」

「まだ決まっちゃいねえよ。落ちちまうかもしれないし」

「安心しろ、俺は地元に残るからさ」三人目の少年が、胸を張ってそう言った。

「お前、地元の大学行くの？」

「いや。親父の工場で下働きさ」

「おやおや、お前、宇宙飛行士になるんじゃないのか？」と、にやにや笑い。「小学校の文集には、たしかそう書いてたよな？」

「うるせえな、そんな昔のことはいちいち覚えてねえよ」と、照れくさそうに答える。

『昔のこと』、か」と、肩をすくめる。「なんだか、年寄りくさい言い方だな」

「ともかく、高校卒業しても、何も変わりやしないさ」ビールを飲み干し、アルミ缶をくしゃりと握りつぶす。「おおっぴらに酒と煙草がのめるようになるだけの話さ。俺たちは相変らず集まってはバカ話して、バイク乗り回して、そして海を見に来るんだらうよ。」

「ああ、そうだろうな」残りの少年たちも力強く賛同する。「これからも、俺たちは何も変わりやしないさ」

しかし、誰もがわかっている。きつと、何もかもが変わってしまったのだから。今日みたいにゆっくりと時間を潰せるようなことは、殆どなくなってしまうのだから。

持参したビールを半分ほど消費し、少し酔いが回って来た。そんな時ひとりの少年が、彼らの座っている場所から五十メートルばかり離れた砂浜の上に、何か奇妙な漂着物が転がっていることに気づいた。「なんだ、あれ」

「いや、わからねえよ——薄黄緑の、もこもこした、ヘンなものだな」

「見に行ってみようぜ」「おう」少年たちはフラフラと駆け出す。

奇妙な漂着物の正体は、熊のぬいぐるみであった。潮のせいで色が剥げ、薄気味悪い薄黄緑色の肌を太陽に晒していた。片方の目は取れ、残ったもう片方の目は廃屋の窓のように薄暗かった。右手がもげて、その傷口からは内臓のような綿が飛び出していた。水を含み、全身が奇妙に肥大していた。しかしぬいぐるみはそんなことなど気づいてすらいなかった風情で、作られた時と同じように、愛想のよい笑顔を浮かべたままなのだった。

「うえっ！」少年のうちの一人は、思わずそう叫んで後ずさった。「なんだこれ！気持ち悪い」

「ぬいぐるみが、なんでこんなところに……」

「俺はわかるぜ」最後にやって来た少年は、そう言って虚勢を張り、ぬいぐるみを拾い上げる。残りの二人は「ひえっ！」と声を上げた。

「この人形はきつと、自殺者の形見だよ」

「止せよ」「何を証拠に」

すっかり縮み上がってしまった少年二人を前に、ぬいぐるみを手にした少年はニヤリと微笑む。そして、岸壁の一角を指差した。

「あの崖が自殺の名所だって話、聞いたことあるだろ？」

『「名所」ってのは大げさかもしれないけど、確かにあそこから飛び降りて死ぬ奴は多いらしいな』「ホラ、一ヶ月前もその崖の上から飛び降りた奴がいたって聞いたぜ……」

「俺が思うに、どんな奴かは知らねえけど、あの崖からぬいぐるみを抱いて飛び降りた自殺者がいたに違いない。そいつはきつと孤独な人間だったんだ。友達も恋人もいなかったんだらう。話し相手ときたら、部屋に置いてある熊のぬいぐるみだけ——。だから死のうと思っただけ。一人で死ぬのはこわかった。しかし勿論、孤独なそいつには心中相手なんていやしない。だからそいつは、唯一自分が心を許している親友、つまり、熊のぬいぐるみを抱えて飛び降りたんだよ」

沈黙。波の音。

「で、そいつの死体は流されて、暗い海の底に沈んでいった。ぬいぐるみは水中でそいつの手から離れ、潮に乗ってこの砂浜に流れ着いた。とまあ、こういうわけさ。」

「お前、小説家にもなればいいよ。でも、もう気色悪いからその話はやめろ。」

「あにく俺は気色悪い話が好きなんだよね」少年はぬいぐるみを砂浜に置き、言った。「まあ、あんまり気色悪がるなよ。自殺者の連中、きつと悲しんでるぜ。」そして、沖の方にそそり立っている巨大な岩——島と呼ぶにはやや小さい——を顎で示した。「見てみるよ。あの岩、浮かばれない自殺者の霊が集う場所だって話だぜ。みんな死んだ後も悲しいまんまで、あの岩に集まるのさ。かわいいそうじゃないか」

「その話は聞いたことがあるよ——」かもめの鳴き声が聞こえてくる。「あの岩は昔から幽霊の集会所なんだって、ばっちゃんが言ってた。夕暮れ時には、鬼火が見えるんだってさ」

「鬼火？鬼火ってなんだよ」

「ヒトダマみたいなものだろ。霊が燃やす火のことさ」

「お前は小説家、そいでお前は妖怪研究家にもなればいいよ。くだらない」

「お前、こわいのか」

「こわかねえよ！つまらない迷信だって言ってるだけだ！」

無然とする少年、そして肩をすくめる少年、ニヤニヤ笑いを浮かべた少年。またしても沈黙が彼らを支配する。波の音が聞こえて来る。

しばらくして、無然としていた少年は、少し決まり悪そうな顔をして口を開く。

「——なあ、この辺りの自殺者の霊はみんな、あの岩に集うのか」

「おいおい、さっきは『つまらない迷信だ』の一点張りだったくせに」

「ああ、つまらない迷信だろうよ。だけど——」少年は口ごもる。「——いや、やっぱりいや」

「なんだよ。言いかけて止めるなよ、気になるだろ。」

「いや、なんつうか暗い話になるだけど——」少年はつま先で砂浜を突きながら言う。「——田村の霊もあそこにいるのかなって思って」

沈黙。かもめの鳴き声と波の音が、鋭利なナイフのように空間を切り裂いていった。

「ごめんな、変なこと言って」

「いや、いいよ、俺も実は同じこと考えてた。」

「俺も」

「お前もか——」

「まあ、田村が死んだのは海じゃなくて学校でだったけどな。」

「でもうちの学校、たまに磯臭い風が吹いてくるだろ——。あの風に乗って行けば、岩までたどり着けるんじゃないか？」

「小説家の次は、詩人みたいなことを言ってるよ」少年は無理に軽口を叩いたが、誰も笑う者はいなかった。

田村遼子は、少年たちの高校の同級生だった。病的なほど白い肌と、折れそうなほど華奢な肢体を持った少女で、何を考えているのかまったくわからない生徒だった。一点の曇りすらないその大きな瞳孔で見つめられると、誰も何も言えなくなってしまうのだった。学校は休みがちで、たまに登校した時も、ずっと一人で過ごしていた。肩まで伸びた黒髪の中に表情を隠して、彼女はいつも俯きがちだった。

田村は高校二年の夏休みが終わる直前に、校舎裏の公衆便所の横で首を吊っていた。枯れた木の枝のような痛々しい体が、涼風に揺られていた。新学期、始業式の後に全校集会が開かれた。

教師たちはむなし話しかしなかった。少年たちは聞いていなかった。

田村がなぜ死んだのかは結局わからなかった。その謎をめぐる、数限りない、おぞましい噂が囁かれた。それらの噂は時をおかずして泡のように消滅し、そのうちいくつかは「真実」としてみんなの心の中にしまわれた。そして記憶の霧の中に埋没していった。納得のいく理由なんてあるはずがないのだ、なぜ一人のやせ細った少女が、秋風に吹かれて木にぶら下がっていなければならなかったのか――。

「シヨックだったよな」

「うん」

沈黙。波の音。

「――俺、田村のこと好きだったんだよ」

「え？お前もかよ！」

「お前もか！」

「実は俺もさ――」

「なんだ、みんなか。田村は人気者だったんだな――」

しかし三人とも、よくよく考えてみれば田村のことを何一つ知らなかった。たまにしか教室で見かけなかった、今にも消え入りそうな、そして事実消え入ってしまった少女。夏が終わると、彼女も何処かに去っていき、そのまま、少年たちの時間は止まってしまったのだった。もう冬が到来してから久しく経つというのに。

「鬼火、見ようぜ」長い長い沈黙の後で、誰からともなく、こんな意見が出た。

「暗くなるまで待って、鬼火見ようぜ」

そして彼らは砂浜に体育座りをして、日が暮れるのを待った。冬の日の入りはあつという間で、その後には肌を焼くような冷気が海から流れ出て来た。彼らは待った。残りのビールを飲み干しながら、彼らは待ち続けた。どれぐらい待っただろう。酔いのせいで体は火照っていたが、寒さは着実に彼らを蝕みつつあるようだった。ビールが尽きた後で、少年の一人が「親父のをくすねてきた」と言って取り出したポケット・ウキスキーを回し飲みした。三人とも、ウキスキーを飲んだのはこれが初めてのことだった。ビールとは比較にならないアルコールのカウンターパンチに朦朧としながらも、彼らは待ち続けた。どれぐらい待っただろう。潮が満ちて来た。もう諦めて家に帰るか、と誰もが思い出したその時だった。岩の周りを漂う、光のようなものが見えた。

「おい、あれ見ろよ！」

「灯台の火だろう」

「よく見てみる――灯台じゃないぜ」

沈黙。

波の音が響いてくる。

「もっと近くで見ようぜ！」

「泳いで岩まで行くってのか？」



「おうよ！」

「おいおい、死ぬ気かよ」

「大丈夫だってばよ。俺、ウキスキーのおかげで体が熱くなってるんだ。お前だって熱いだろ」

「まあ、確かに熱いけど、でもいくらなんでも……」

「行こうぜ！もう一口ウキスキーを飲めば、海水の冷たさなんて屁でもねえよ」

「バカもいい加減にしるってば」

「行こうよ」黙っていた少年が口を開いた。「たぶんここで行かなければ、俺たちずっと後悔することになるよ」

少年たちは黙り込んだ。今日海に来た時、彼らは「これから、俺たちは何も変わりやしないさ」と互いを励ましあったものだ。しかし、本当は誰もそう信じていなかった。たぶん、色々なことが変わろうとしているのだろう。そして、色々なことが終わるのだろう。もう何にせよ、これが最後のチャンスだということだけははっきりと分かった。ここで決着を付けるしかないのだ。

「よし、行こう」

少年たちは立ち上がった。

凍てついた静かな夜の海の中へ、少年たちはゆっくりと入って行った。岩はとてつもなく遠くに見えもしたし、それと同時に、手を伸ばせば触れられるほど近くにあるようにも感じた。その周りを、それは幾つものぼんやりとした灯りをともしながら巡っていた。ただその灯りだけをたよりに、少年たちは息を潜め、両手で水をかき分け続けた。

## 十、恐怖

その夜、「恐怖」が街を駆け抜けた。「恐怖」は雨と雷を孕んだ雲のように重く垂れ込め、そして研ぎたての鋭利なナイフのように空気を切り裂いていった。「恐怖」はあまねく全ての人々の元を訪れ、その骨に齧りつくのだった。街路を吹く風が止まる一刹那、「恐怖」は空をも覆い尽くしてしまうのだった。

デュプリー食堂の親爺は店の片付けをしていた。「恐怖」は食堂の看板にへばりつき、ガタガタと揺さぶった。親爺は何食わぬ顔で暖簾をしまい、たこだらけの両の掌を真つ赤にしながらい、テールブルにこびりついた油污れを布巾でこすっていた。テレビは、だらだらと続く退屈な野球の試合を映し出していた。それにしても今夜はやけに冷え込みやがる、と親爺は呟いた。風邪をひかないように気をつけなとな。

このところ、地上げ屋に雇われたヤクザどもが大挙してやって来やがる。こっちは客の相手を手一杯なんだ、ごく潰しの相手をしている暇なんざ無いんだよ。それにしても、あいつら老人を苛めて粹がatterるぐらいなら、うちで皿洗いのバイトでもして真つ当に生きていけばいいのに。まあ、そんなことを言っても仕方がないか。あのヤクザどもだって必死なんだろう。哀れなものだ。

とにかく、俺はただ黙々と料理を作るだけさ。明日も、明後日も、その次の日も。親爺は油にまみれた布巾を凍てつくように冷たい水道水で洗い、深呼吸をしながら腰を伸ばした。鼻の下に蓄えた髭に、白いものが混じっている。さて、仕込みを済ませてから寝るとしよう。

「恐怖」は安い下宿屋の一室に雪崩れ込んだ。部屋の真ん中では、ペンキにまみれたガラクタの山に埋もれて、画家ムラタ氏が横たわっていた。その枕元を一匹のアブラムシが、冷気に身を触まれながらよろよろと横切って行った。ムラタ氏は寝返りをうちながら、「恐怖」を肺いっぱい吸い込んだ。「恐怖」はやせ細った彼の四肢の隅々にまで行き渡った。ムラタ氏は全身を満たす「恐怖」の味わいにうっとりとなり、その陶酔感に心行くまで浸り切った。思わず彼は体を起こし、絵筆を握った。そして、部屋の壁に絵をなぐり描き始めた。

ムラタ氏がその奇怪な絵を書き終える頃、恐怖は彼の中からすりりと抜け出した。そしてムラタ氏はまたぞろ床にごろんと寝転がり、浅い眠りを貪り始めるのだった。アブラムシは部屋の隅まで行った所でとうとう力尽き、触覚をはためかすだけの力を残してガックリと膝を付いた。

地上げ屋のヨネタ氏は、真鍮のドアの隙間から潜りこみ、天蓋つきのベッドの上に這い上がった。来た「恐怖」を五月蠅げに払いのけた。この商売をやっていると、「恐怖」に眠りを邪魔されることなど日常茶飯事だ。もはや「恐怖」の扱いにも慣れきってしまった。

「恐怖」は、しつこくヨネタ氏の脛にまとわりついてくる（彼の膝は、シルクの靴下で包まれている）。それを何度も蹴飛ばしながら、ヨネタ氏は自分が少々疲れ気味であることを感じた。最近の仕事が多忙を極め、のんびりと観劇をしたり茶を楽しんだりする暇もないのだ。とにかく、あの計画を何とかして軌道に乗せなければ。例の食堂の頑固親爺はまだ立ち退こうとしない、腹

立たしい。しかし、着々と計画は進みつつあるのだ。昨日は林を更地にする工事が始まった。以前、あの区画で視察も兼ねて茶会を催したこともあったな。立派な林だった。潰すのが惜しいぐらいだ。だから潰すのだ。潰して更地にし、レジャー施設を建てるのだ。たちの悪い冗談のようだな、まったく。そしてヨネタ氏は力いっぱい「恐怖」を蹴飛ばした。

「恐怖」は、街に暮らす全ての少年少女の心臓を貫き、そして少年少女の親たちの胃袋を収縮させた。少年少女は布団にくるまったまま、胎児のような姿勢で夜が終わるのを待った。だが、あまりに夜は長く続くのだった。彼らの親たちは節だらけの手で頭を抱え、足元に沈殿した冷たい空気にも気づかないでいた。台所では、蛇口から滴る水の音がかすかに空気を震わせていた。皆、時が過ぎることだけを祈っていた。しかし時が過ぎた後で何が変わるのか、それは誰も知らないのだった。

「恐怖」は街を横切ってゆく。街角では、廃墟になった教会の前で、パントマイム・クイーンが無言劇を演じていた。「恐怖」は彼女に顔を向けもせず、彼女もまた「恐怖」を一瞥もしなかった。そして「恐怖」は街を通り過ぎ、後には何事もなかったかのように、誰も見る人のいないまま、たった一人の夜更けの夢言劇が続いているのだった。

「恐怖」は林に流れ着いた。林はもはや「林」ではなくなっていた。痛々しい倒木、不恰好な切り株が点在するだけ——その無残な風景の真ん中、切り倒された巨大なくぬぎの木の下に、威張ったクワガタ虫がいた。

「恐怖」は、何も言わずに夜の闇の中に帰って行った。

そして、朝が来た。

## 十一、威張ったクワガタ虫、眠る

威張ったクワガタ虫は、もうすぐ見えなくなるであろう自分の目を半分だけ開いて、空を仰ぎ見た。あいにく、空は見えなかった。朝の日の光が微かに感じられるだけであった。

彼の体の上には、切り倒された木の幹がのしかかっていた。昨日は一日中、電気ノコギリを振り回す人間たちが林の中を歩き回っていた。騒々しい一日だった。それに引き換え、今は打って変わって静かだ。何もかもが壊しつくされてしまったのだろう。クワガタ虫は、半分だけ開いていた目を閉じた。まぶたの裏に、いつか見た蒼い空の色や、生い茂った木々の緑色が映っているように思えた。

クワガタ虫はもはや威張ることも止めていた。威張る相手もいなくなってしまった。いや、最初から彼は威張ってなどいなかったのだ。彼は静かに何かを待っていた。待つまでもなく、それは訪れようとしていた。静かな眠りの時間が、ゆっくりと彼を取り巻きつつあった。

朝の冷気が辺りを覆いつくしていた。踏み荒らされた草木に露が降りていた。ぽとりと、クワガタ虫の角に雫が落ちてきた。彼はとうにあらゆる感覚を失ってしまったはずだったが、どうしたことだろう、その雫の心地よい冷たさを感じる事ができた。なんて心地良い、とクワガタ虫はつぶやいた。ずっと忘れていた、いや、今まで気づきもしなかった、朝露がこんなに美しいものだったなんて。今まで漫然と在ったものの全部がいとおしく感じられた。林の仲間たちも、空や風や水や太陽も、そして、彼のすべてを踏み躪って行った、あの電気ノコギリを持った連中すらも。

あの電気ノコギリを持った連中を、クワガタ虫は許すことにした。体は少しも動かず、意識も遠ざかってゆきつつある今、おれに出来ることと言えば、あの連中を許してやることぐらいだ。あの連中は決して許されないことをして回ったのだ。でも、おれだけはあいつらを許してやるよ。それが何になるのか、分かりやしないが。

それにしても静かだ。クワガタ虫は細く息を吐く。まるで夢を見ているようだ。ことによると、おれはずっと夢を見ていたのかもしれない。今だって夢の中なのだろう。おれはもうすぐ眠りにつく、そしておれは眠りにつくことで、やっと目覚めるのだろう。心地良い静寂の中で。

ともかくおれはあまりにも長く生き過ぎてしまった。威張ったクワガタ虫はそう呟いた。おれは一度も恋をしないまま、余りにも長く生き過ぎてしまったのだ。きっと、一度も恋をしなかったからこそ、こんなにも長く生きてしまったのだろう。

しかし、そろそろおれも土に還る時が来たようだ。それを別に恐ろしいとは思わない。ここよりもほんの少しだけ静かな場所、おれがよく知っているところに戻るだけだ。まだ幼虫だったころに、おれを優しく包んでいた世界に還るだけのことなのだ――。

あの舎弟カブト虫もきつと待ってくれていることだろう。それからおれが男手一つで育て上げた、可愛げのないうじ虫たちも。おれはあいつらに会いに行くのだ。

本当に静かな朝だ。クワガタ虫はそう思った。

夜更けの夢言劇（二〇〇八年一月二十六日〜三月十九日）

パントマイム・クイーン（二〇〇八年三月八日）

威張ったクワガタ虫のはなし（二〇〇八年三月三日）

地上げ屋ヨネタ氏、あくまで野点を愉しむ（二〇〇八年二月八日）

世界うじ虫会議（不明。二月〜三月上旬）

ささいなもめごと（二〇〇八年三月十五日）

舎弟カブト虫の嘆き（二〇〇八年三月八日）

画家ムラタ氏の帰り道（二〇〇八年三月一日）

季節の移ろい（二〇〇八年三月十九日）

海の火（二〇〇八年二月七日）

恐怖（二〇〇八年三月八日）

威張ったクワガタ虫、眠る（二〇〇八年三月八日）